Global Classrooms

グローバル・クラスルーム日本協会 報告書

2023 年度

高校模擬国連国際大会への第 17 回日本代表団派遣支援事業

一般社団法人グローバル・クラスルーム日本協会
Japan Council for Global Classroom (JCGC)

目次

はじめに.....2

団体紹介.....3

議場概要・派遣報告.....5

参加者報告(アドバイザー).....10

参加者報告(派遣生).....14

支援団体一覧.....29

はじめに

この度、高校模擬国連国際大会への 17 回目の日本代表団派遣支援事業の報告書を皆さまにお届けできる運びとなりました。本事業にご後援いただいた関係省庁・団体、ご協賛、ご協力いただいた企業・法人等、多くの皆さまからの温かいご支援・ご高配を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

本事業は過去の全日本高校模擬国連大会において優秀な成績を収めた 7 校 15 名の高校生が日本代表団として国際大会に参加するというものです。今回、日本代表団はオランダ、メキシコ、ベトナムの大使として世界中の高校生が集まる舞台で、できる限りの準備をして会議に臨みました。

今回の派遣支援事業において派遣生は皆､持てる力を総動員して世界に挑戦しました｡4 年ぶりに現地に赴き、世界中の高校生たちと議論を交わす中で、うまくいくこともあれば思い通りにいかないこともあったはずです。そうして世界の広さを肌で感じることは、自分の能力や将来について考えだす大きなきっかけとなったのではないでしょうか｡派遣生が今回の派遣を「スタートライン」として捉え、新たな未来への一歩を踏み出すことを 心より願っております。

最後に、本書が多くの人に読まれ、日本における高校模擬国連活動のさらなる普及と発展の一助になることを期待しております。今後とも、グローバル・クラスルーム日本協会へのご支援・ご鞭撻のほどをよろしくお願い申し上げます。

グローバル・クラスルーム日本協会 2023 年度 事務総長 西田翔

団体紹介

グローバル・クラスルーム日本協会は、高校模擬国連活動の普及と発展を目指し、全日本大会の開催及び国際大会への派遣支援活動を行う団体です。私たちは、以下の理念に基づいてこれらの活動を行なっています。

「国際連合及び国際関係に関する研究と国際問題の正確な理解又その解決策の探求を促進するとともに、豊かな国際感覚と社会性を有し未来の国際社会に指導的立場から大いに貢献できる人材を育成し輩出する。」

2007 年、弊協会の前身たるグローバル・クラスルーム日本委員会が日本で初めて高校模擬国連国際大会への日本代表団の派遣支援を行ったことから、日本の高校模擬国連活動が本格的にスタートしました。それ以降、全日本高校模擬国連大会を毎年開催し、優秀な成果を残した生徒の高校模擬国連国際大会への派遣支援を続けています。

会員

アドバイザー（敬称略）

特別顧問　明石 康
公益財団法人京都国際会館理事長／元国連事務次長

評議員（敬称略・順不同）

評議員・理事　澤田 宏
岐阜県立岐阜高等学校教諭

評議員・理事　竹林 和彦
早稲田実業学校教諭

評議員・理事　米山 宏
公文国際学園中高等部教諭

評議員　紀谷 昌彦
日本模擬国連 OB／東南アジア諸国連合（ASEAN）日本政府代表部特命全権大使

評議員　中村 長史
日本模擬国連 OB／東京大学大学院総合文化研究科特任講師

運営会員（敬称略・順不同）

事務総長　西田 翔
　慶應義塾大学法学部政治学科３年

副事務総長　山内 梨々花
　上智大学法学部法律学科３年

副事務総長　兼　派遣担当主査　後藤 慧
　東京大学教養学部文科二類２年

副事務総長　兼　主計局長補佐　清原 萌香
　上智大学法学部法律学科２年

研究局長　出口 啓貴
　早稲田大学政治経済学部政治学科３年

広報局長　市川 茉由子
　明治学院大学文学部英文学科３年

主計局長　大久保 慶隆
　慶應義塾大学総合政策学部総合政策学科２年

総務局長　羽山 雄貴
　宇都宮大学工学部基盤工学科２年

模擬国連推進主査　田中 愛莉
　山形大学人文社会学部人文社会学科２年

模擬国連推進主査　丸小野 成輝
　東京大学教養学部理科三類２年

模擬国連推進主査　森脇 優
　京都大学教育学部２年

派遣担当主査　丹後 向日葵
　早稲田大学国際教養学部国際教養学科３年

委員　持松 進之介
　Sciences Po Paris Campus du Havre １年
　慶應義塾大学経済学部経済学科２年

委員　大野 秀征
　慶應義塾大学法学部政治学科２年

委員　曽我 菜々美
　上智大学法学部国際関係法学科２年

委員　瀧本 悠美
　津田塾大学学芸学部国際関係学科２年

委員　筑本 普
　早稲田大学文化構想学部２年

委員　宮澤 佑奈
　早稲田大学社会科学部社会科学科２年

委員　後藤 恵望
　成蹊大学理工学部理工学科１年

委員　高槻 俊輔
　東京大学教養学部文科三類１年

委員　田端 開
　慶應義塾大学法学部政治学科１年

委員　中島 大雅
　東京大学教養学部文科一類１年

議場概要・派遣報告

企画名称

2023 年度高校模擬国連国際大会への第 17 回日本代表団派遣支援事業

主催

グローバル・クラスルーム日本協会(JCGC)

内容

米国国連協会などの主催により開催される高校模擬国連国際大会(Global Classrooms International Model United Nations Conference)に、グローバル・クラスルーム日本協会主催の第 16 回全日本高校模擬国連大会にて選出された高校生並びに第 15 回全日本高校模擬国連大会で選出され参加を希望した高校生が日本代表団として参加するための派遣支援事業である。

参加者

1)日本代表団（15 名）

海城高等学校	土屋 哲史　桝田 啓太郎
渋谷教育学園渋谷高等学校	多胡 七香　谷田 そよ
渋谷教育学園幕張高等学校	笹尾 佳音　山下 実穂
聖心女子学院高等科	今寺 玲菜　近藤 彩叶　三澤 聖子
灘高等学校	池田 高啓　山岸 侑生
西大和学園高等学校	小島 圭登　松本 拓己
桐朋高等学校	稲田 孟　小池 翔太

2)引率教員(7 名)

海城高等学校	山口 孝一郎
渋谷教育学園渋谷高等学校	室崎 摂
渋谷教育学園幕張高等学校	齊藤 智晃
聖心女子学院高等科	廣野 聡子
灘高等学校	宮田 幸一良
西大和学園高等学校	高﨑 道裕
桐朋高等学校	杉山 尚史

3)グローバル・クラスルーム日本協会(4 名)

事務総長・派遣担当主査　　西田 翔
副事務総長・派遣担当主査　　後藤 慧
研　　究　　局　　長　　出口 啓貴
派　遣　担　当　主　査　　丹後 向日葵

参加会議

高校	派遣者	議場	担当国	議題
海城高等学校	土屋哲史 桝田啓太郎	世界保健機関 （WHO）	Netherlands	Discrimination against Marginalized Communities in the Healthcare System
渋谷教育学園 渋谷高等学校	多胡七香 谷田そよ	国連開発計画 （UNDP）	Mexico	Fostering Inclusive Political Processes in Post-Conflict Societies
渋谷教育学園 幕張高等学校	笹尾佳音 山下実穂	世界保健機関 （WHO）	Mexico	Discrimination against Marginalized Communities in the Healthcare System
聖心女子学院高等科	今寺玲菜 近藤彩叶	国連総会第五委員会 （GA5）	Netherlands	Devising a Sustained Financing Plan for Peacekeeping and Peacebuilding
灘高等学校	池田高啓 山岸侑生	国連開発計画 （UNDP）	Netherlands	Fostering Inclusive Political Processes in Post-Conflict Societies
西大和学園高等学校	小島圭登 松本拓巳	国連総会第五委員会 （GA5）	Mexico	Devising a Sustained Financing Plan for Peacekeeping and Peacebuilding
聖心女子学院高等科 /桐朋高等学校	三澤聖子 稲田孟 小池翔太	国連開発計画 （UNDP）	Vietnam	Fostering Inclusive Political Processes in Post-Conflict Societies

政策発表会

オンラインにて派遣生が国際大会に向けた準備の成果を英語で発表しました。今までのリサーチの成果をまとめ、会議で提言する政策を立案する中で、事前の準備で得た知識を整理できていたようでした。当日は早稲田大学国際学術院教授の上杉勇司様と、東京大学大学院教授の佐藤安信様にお越しいただき、派遣生に対してフィードバックをしていただきました。政策発表会を通じてペアのみでは気づくことのできなかった新たな視点を獲得し、その後の会議当日までの準備に向けて気持ちを切り替える機会になっていました。

（JCGC/後藤）

国連開発計画(UNDP)

派遣事業の二日目には、国際連合開発計画（UNDP）のニューヨーク本部に伺う機会をいただきました。UNDP とは開発途上国の発展に取り組む機関であり、貧困や環境問題、紛争などに渡る広範な分野への支援を主導しています。上級顧問を務めていらっしゃる伊藤綾子様より、このような UNDP の働きと日本とのパートナーシップについてご説明いただきました。

更に、マラウイ共和国で UNDP 常駐代表を務めていらっしゃる小松原茂樹様とオンラインで繋がり、国際協力の意義と課題について実体験を交えたお話を伺いました。特に「国連は国連であることに価値がある」という、193 か国が集結する国連の意義深さを語るお言葉により、派遣生は翌日から参加する会議の重要性を改めて確認したようでした。また、質疑応答では派遣生の政策へのフィードバックをいただきました。派遣生にとっては、会議の枠を越えて国際社会について考える貴重な機会となりました。

（渋幕/山下）

日本政府代表部

4/26 に日本政府代表部へ表敬訪問をさせていただき、そこで UN 代表部総務部に所属されている堀場千鶴様のお話を伺うことが叶いました。

堀場様は 2022 年秋に国連代表部に配属され、それまでは安全保障のラテンアメリカ担当をされていたそうです。当日は日本政府の「効率的かつ効果的な国連へ」という指針や平和構築に関する公開討論の取り組み、日本の平和構築の捉え方、考え方などについて詳細に語ってくださいました。

特に堀場様から伺ったお話で印象深かったこととして、国連に出席するということは提案することの責務がある、という内容がありました。妥協点を見つけることはそれこそ模擬国連と同じですが、その示す政策や指針に付加価値をどのようにして持たし、どれだけ革新的なとこまで踏み込めるか、そしてこれを達成するために長期間に渡る準備や交渉を行うといったことを外交の最前線にいる方から伺うとより一層の迫力を持って体に入ってきました。

この場をお借りして貴重なお時間を割いてお話くださった堀場様に深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

（海城/桝田）

派遣生

受賞

最優秀賞(Secretary General Award)

渋谷教育学園渋谷高等学校

優秀賞(Honorable Mention Award)

渋谷教育学園幕張高等学校

灘高等学校

参加者報告(アドバイザー)

西田 翔
グローバル・クラスルーム日本協会　事務総長・派遣担当主査
慶應義塾大学法学部政治学科 3 年

本事業実施にあたって弊協会の事業にご支援ご協力いただいている皆様、並びに派遣生の皆さんに御礼申し上げます。

本年度は 4 年ぶりの「リスタート」となった大変重要な年となりました。昨年までは渡米を試み方策を模索して参りましたが、新型コロナウイルス感染症の蔓延を鑑み、オンラインでの会議参加を決断いたしました。しかしながら、多くの教育現場でも修学旅行等行事が再開する中、本事業も実際に渡米し、現地の雰囲気を体感するという最大のミッションを完遂することができました。差し当たり、渡米にあたってご調整にご協力いただきました皆様にはとりわけ厚く御礼申し上げます。

本年の日本代表団は、その団結力に一線を画すものがありました。大会の議場数の関係上、同じ議場に日本代表団の 2 チーム以上が参加するという例年とは異なる大会形態になりました。しかしながら、会議の合間の時間には互いに労う姿も見られ、高校生が一国の大使を模擬するという難度の高い状況の中で、互いを尊重し合う姿勢も見られたように思えます。また、米国で 1 週間滞在するという日常とはかけ離れた生活をする中で、様々な大変さがあったかと思いますが、支え合いこの事業を完遂させる気概が常に見られました。会議を通して、普段は接することのない他者と関わり合うことで得られた学びももちろん多くあったかと思いますが、それ以上に想定外にも対応し柔軟に行動する力を会得し大きく成長されたものと思います。

弊協会は、「国際連合及び国際関係に関する研究と国際問題の正確な理解又その解決策の探求を促進するとともに、豊かな国際感覚と社会性を有し未来の国際社会に指導的立場から大いに貢献できる人材を育成し輩出すること」を目的としています。本事業は、日本国内に留まらず、世界レベルに挑戦することで学びを得る大変有意義なものであることを再確認いたしました。引き続き、全日本高校模擬国連大会を中心に、弊協会として高校生に向けてよい「学び」の機会となる模擬国連活動の普及・推進に向けて尽力してまいりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

後藤慧
グローバル・クラスルーム日本協会　副事務総長・派遣担当主査
東京大学教養学部文科二類 2 年

初めに、本年度の事業の実施にあたりご協力・ご支援いただいた皆様を始め、各校の先生方、派遣生一同に心より厚く御礼申し上げます。私は本事業にて、高校生の会議準備のサポート並びに渡航に向けた調整を行ってまいりました。

本年は新型コロナウイルス感染症の感染状況が落ち着き、多くの規制が緩和されたことで、2019 年以来、実に 4 年ぶりにニューヨークの現地で国際大会に参加することができました。3 年の空白によりかつての派遣支援事業を知るメンバーが少なく、一から本事業を再び立て直すことは多くの苦難もありました。その中で、多くの方々のご尽力・ご協力もあり無事本事業を終わらせることができました。

本年度は担当国が派遣団内で異なり、高校生はそれぞれメキシコ、オランダ、ベトナムのいずれかの国の大使として会議に参加しました。7 校の派遣生は 3 つの議場に割り振られました。難しい議題が並ぶ中で高校生は悪戦苦闘しながらも、政策発表会でのフィードバックや入念なリサーチを通じて議題に対しての理解を深めていったように感じます。また、担当国が違えど派遣団の結束力は固く国際大会に向けてよい雰囲気で望めていたことがとても印象的でした。同じ議場に派遣生がいることで、派遣生同士が仲間であり、同時にライバルでもあるという状況が生まれ、切磋琢磨しながら目覚ましい成長があったように思います。

そして国際大会の当日、派遣生は慣れない議事進行や議場の様子に戸惑いながらも準備をしてきたものを活かす方法を模索し続けていました。スピーチの内容を調整したり、議論の進行を工夫したりするなど国際大会の中で少しずつ”自分流”を確立し、挑戦する姿には心を打たれるものがありました。新型コロナウイルス感染症の流行が象徴するように、社会はいつ大きく変化をするかは予想できません。しかし、国際大会の場で柔軟に自分を変化させることのできた派遣生はきっとこれからの時代にどんな苦難があっても乗り越える力があるものと思います。

最後に、本事業にご支援ご協力賜りました皆様並びに携わったすべての方々に改めて感謝を申し上げ、私からの報告といたします。

出口啓貴
グローバル・クラスルーム日本協会　研究局長
早稲田大学政治経済学部経済学科 3 年

初めに、本事業実施にあたり手厚いサポートをしていただきました協賛企業の皆様、学校の引率教員の先生方、そして保護者の皆様に改めて感謝申し上げます。本事業を無事に終えることが出来ましたのは、皆様からの支援あってのことと思っております。

今年は 2019 年以来実に 4 年ぶりにニューヨークへの渡航が実現しました。しかし 4 年前の派遣事業を知るものが協会の中にも少なくなっており、またこの 4 年間で大会そのものを含めて多く変化が生じており、派遣事業実施にあたっては困難に直面することも多くありました。しかし皆様の多大なるサポートもありまして、無事に派遣事業を終えることが出来ました。

私は今回の派遣事業におきまして、生徒を会議面からサポートしてまいりました。議題そのものへの理解や、議題における各国の国益の設定、会議当日の会議戦略などについて、生徒たちとの複数回のメンターの実施などを通してサポートを行いました。今年の大会における議題は、どれも複雑なものであり大学生であっても理解をするのに苦労するものでありました。また担当国においてもそれぞれの議題において重要な役割や、国際的に特異な立場を有している国が多く、担当国理解においても苦戦が予想されました。しかし派遣生はみな、議題と自分の国に正面から真摯に愚直に向き合い続け、こちらの想定を超える完成度の会議準備をしてくれました。

会議本番においても、言語の壁がある中でも臆することなく積極的な発言や交渉を行っていました。時に日本の会議との違いに戸惑っている様子もありましたが、その中でも自分を見失うことなく適応していきました。私自身は近くから見守ることしか出来ませんでしたが、我々の支えなど不要と思えるほどたくましい姿を生徒たちは見せていました。

国際社会は今、様々な困難に直面しています。そしてそれに対する有効な解決策は必ずしも示されているとは言えない状況です。このような時代において派遣生が今回の派遣事業で得た経験を糧に、明るい未来を切り拓いていってくれることを心から願っています。

そして改めて、今回の派遣事業に関わった全ての皆様に感謝申し上げます。

丹後 向日葵
グローバル・クラスルーム日本協会
早稲田大学国際教養学部国際教養学科 3 年

はじめに、本派遣支援事業にご支援・ご協力を賜りました全ての皆様に厚く御礼申し上げます。私は、一般社団法人グローバル・クラスルーム日本協会の派遣担当主査として、派遣生の会議準備および当日のサポートという形で本事業に携わりました。

新型コロナウイルスの感染拡大により初めて対面での派遣支援事業が中止されてから 3 年が経過し、ようやくニューヨーク現地での派遣支援事業が実現いたしました。4 年ぶりの渡米ということで、オフラインの国際大会の経験がない私としては、議場の雰囲気や会議の進め方について多くの未知なる点がありました。派遣生も同様に、国際大会の雰囲気を掴めない状況で大会を迎えることに対して不安を感じていたことでしょう。

17 期派遣団はオランダ、メキシコ、ベトナムの大使として 3 議場に分かれて会議に参加しました。それぞれの議題は先例も少なく難解なものでしたが、派遣生たちは半年に渡る準備期間の中で、担当国が議題に対してどのような立場をとっているのか、どのようなアプローチができるのかを綿密に考えており、そのリサーチの深さは目を見張るものでした。会議当日は、慣れない英語での会議の中で普段とは違う議事進行や発言の形式など、派遣生にとって多くの困難が立ちはだかったことでしょう。しかし、そのような状況でも派遣生は積極的にスピーチや交渉に挑み、誠実な姿勢で他国に自分たちの意見を伝えて交渉する姿はとても印象的でした。

派遣報告会や報告書を通して、今回の派遣支援事業が派遣生にとってただ模擬国連の国際大会に参加しただけでなく、異なるバックグラウンドを持つ人との言葉の壁を越えた対話など、様々な学びを得られた場になったことが伺えます。また、オンラインでは得られない、ニューヨーク現地だからこその学びも多くあったことでしょう。今回の経験を糧にして、派遣生たちには自身の目標に向かって頑張って欲しいと思っています。

最後に、平素より弊協会の活動にご支援・ご協力賜りました皆様に改めて感謝申し上げますとともに、今後もご厚誼を賜りますようお願い申し上げます。

参加者報告(派遣生)

模擬国連に向き合う姿勢から得た気づき

土屋 哲史　海城高等学校

今回、ニューヨークでの模擬国連の世界大会に日本の派遣団の一員として参加しました土屋です。本報告書では今会議で得た経験と気づきを共有させていただきます。

本会議はニューヨークで三日間に渡り開催され、日数こそありましたが、実際にやってみると時間が足りないほどで思ったよりあっという間に会議が進んでいくのを感じました。

会議では、WHO でオランダ大使として 「医療から除外されている人々(移民や先住民、妊婦、児童など)に対する差別の排除」について、経済面や AI、教育などの視点から話し合いました。

オランダとしては移民問題や途上国の支援、AI のバイアスなどといったトピックを具体的に扱い、1 日目は、初めての国際大会でいつもと違う形式やネイティブの議論スピードなど雰囲気に圧倒されてしまい、自国の意見をあまり伝えられず反省すべき点が残った初日となりました。2 日目はその反省を元により自国の意見を伝えたり政策を入れるように行動できましたが、2 日目から 3 日目にかけてオランダとして特に議論したかった移民問題について十分な時間が得られず、1 日目の失敗が尾を引いてしまい十分に意見や政策を伝え、実際に文言の形にするということができませんでした。結果としても、自国のメイントピックに十分時間が取れなかったことなどの影響もあり、賞が取れず残念でした。

個人的に得られた反省や気づきとしては、大きく分けて二つあります.

1 つ目は事前準備についてです。本会議は議事の全てが英語で行われるということで、日本の会議とは異なった準備が求められました。その面で英語面での準備はしても足りるということは決してなく、他の英語話者の会議参加者との差をどう縮めるかという視点での準備が足りてなく、事前準備では政策などを中心にして英語でどうアプローチするか、伝えるかという意識が足りませんでした。

2 つ目は気持ちや向き合う姿勢で、英語面での差から会議当初はうまく自国の話したいテーマについて話せず、グループに流されてしまっていましたが会議 2 日目はグループで耳を傾けてもらえなくとも少人数に話に行くという姿勢は大事でしあたし、国益を守るためにも強く主張を伝えていく押しの強さや積極性を出していくという気持ちの問題も会議行動に繋がっていました。実際今回の会議はいつもと違う形式の中で相手に合わせた受け身が多く自国のための積極的な姿勢を意識していく重要性とその姿勢の使い分けが重要だと認識できました。

最後に、毎回、模擬国連に参加すると自分がニュースで目にしたことがあるような問題であっても知らないアプローチや考え方、そうなった背景を知ることができ多くの学びを得られます。さらにはその問題に取り組んでいく中で自らの向き合い方や姿勢が見え、会議後には多くの気づきを良い点、改善点含め知ることができ、そのような面を持つのも模擬国連の特徴であり魅力であると思います。特に今回の派遣事業は私自身にとって今まで経験したことがない非常に大きな学びを与えてくれる機会になりました。このような貴重な経験を今後の自分自身の人生や生活の糧としていきたいと思います。

終着点に到着して

桝田 啓太郎　海城高等学校

NY での国際大会に出場する。実際に出場した先輩の話を聞き、憧れを抱いて模擬国連を始めた中 1 の私にとって、それは漠然としつつもいつかは見据えるべき目標でした。そして今では中高 5 年間をかけた青春の終着点であったと感じます。その夢を叶える過程で私は模擬国連から様々なことを得ました。それを交えながら今回の派遣事業について述べさせて頂きます。

私、桝田啓太郎とペアの土屋哲史君は 4/27-29 に「周縁化された社会集団への医療提供体制における差別」という議題の WHO 議場でオランダ大使として会議に出場しました。当日は共にした大使の皆さんがフランクに話を聞いてくれ、非常に安堵したことを覚えています。その中で地球の裏側の高校生も同じ問題意識を持って取り組んでいる事実を目の当たりにし、この感情や活動の共有に言語は関係ないことを改めて確信しました。そして良い政策を創ることと自分を主張することのバランスが大変優れ、より本場の国連に近いであろう国際大会の方式に新鮮さを感じ、この経験を日本の後輩達にも還元していきたいと強く思える 3 日間でした。

また模擬国連や派遣事業を通じて得たものとして、対話をやめないことの重要性、があげられます。実際の国連では核軍縮等、進展がほぼ見られない議題が存在します。それでも交渉の席に着いて妥協点を模索し続けることで遠い未来では達成されるかもしれない。その一縷の望みに真摯に向き合い交渉する最前線の人々がいることを NY にてお会いしたことで再度気付かされ、感銘を受けました。と同時に模擬国連という机上の空論を並べる活動の意義は、眼前の問題を対話で解決するその姿勢の醸成にあるのではないか、という私なりの答えの形成に近づいた気もしています。

次に活動を通して得た財産として「仲間」の存在があります。第一は教えたい/守りたい沢山の大好きな後輩達に恵まれたことです。これは幸運の一言であり、彼らには私の経験を余すことなく伝えたいと考えています。加えて 17 期を含めた同年代の存在です。私たちは中 3 でコロナ禍に突入したため、格段に人数が少ない代でした。オンラインに突然切り替わったことでそれまでの空気感や文化が喪失し、1 から模擬国連の再構築を図るような状況であったことを思い出します。しかしそんな中でも常に切磋琢磨し、奮い立たせてくれ、そして冗談で盛り上がり数多の笑顔をくれた仲間には感謝しかありません。彼らや 17 期の 14 人と出会えたこともまた言葉で形容できない程の財産です。

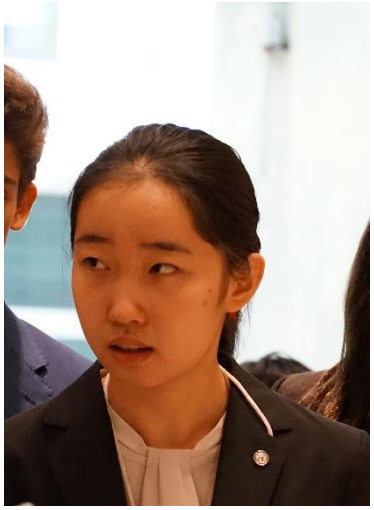
最後は、5 年間やり切ったことです。始めた頃は逆立ちしても敵わない先輩達に羨望の眼差しを送り、いずれはそうなりたいと無我夢中でした。しかし学年が上がるにつれ視野も広くなり、自然と他人への影響や後輩教育等も念頭に置いて活動するようになりました。かつての憧れを後輩が自分に抱いてくれたとは到底思えませんが、後輩達の目標として存在できるようにと最善の努力をしたつもりです。そして次世代にそのバトンを確かに渡すことができたと信じています。

この派遣事業の全ての瞬間が忘れられない一生の思い出になりました。その上でこの活動の終着点に到達したことを嬉しく感じております。私の人生の大きな糧となるこの経験を胸に今後も精進して参ります。

末筆ながら、難しい情勢の中で派遣事業を実現させてくださった GC の方々を含め全ての関係する皆様のご支援に深く御礼申し上げてこの報告文を締めさせて頂きます。本当にありがとうございました。

「憧れの大使像に向かって」

谷田 そよ　渋谷教育学園渋谷高等学校



「本気で問題を解決したい」と心から思って大使として行動できるようになることが、私の模擬国連を始めた頃からの目標でした。たとえ国連を模した会議で実社会に影響を残すことができなくても、当事者意識を持ち、会議の最後まで大使としての責任を全うしたいと考えていました。しかし実際の会議は一筋縄ではいかず、模擬国連を始めた当初は、新型コロナウイルスの影響でオンラインとなった会議に退屈感を抱いていました。対面会議をほとんど経験したことがなかったため、一日中パソコンに向かうことに意味はあるのか、疑問にさえ思っていました。会議が終わった後は、達成感でも悔しさでもなく、ただ疲労を覚えるだけでした。そんな日々が続いていましたが、中学３年生の３月、私は一所懸命に大使として行動する先輩方の姿を目にし、自分もそうなりたいと思い、模擬国連と正面から向き合うことに決めました。

全日本大会への参加を決意してからの約１年間、私は無我夢中でした。時間があればリサーチをし、会議と会議の合間には自分にとっての模擬国連とは何か、理想の大使像とは何か、強みを生かせる自分ならではの会議行動は何か考え続けました。準備中は他部活や勉強との両立に苦戦し、もしかして自分の努力は報われずに終わるのではないかと不安になることもありました。しかし、精一杯の力を注がずに不完全燃焼で終わることの方が怖く、持っている時間のほとんどを準備に費やしました。さらに「本気で問題を解決する」という確固たる目標があったからこそ、自ずと自分がやるべきことが見えてきました。今までは漠然と自国の国益をどう叶えようかと考えていた政策も、本当に国際社会にインパクトを残せるのか常に疑うことでより現実性の高いものを作ることができました。

私にとって未知の世界であった国際大会では、どんなことも無駄なものはひとつもないと思うことができました。議題が幅広く設定されている国際会議では、議論の内容や会議の進行を予測することができず、汎用性の高い準備をすることとなりました。不安の中迎えた会議当日では、今までの経験が思いもしないところで活かされ、地道な努力が報われたように感じました。

今の学校への入学、模擬国連部への入部、憧れる先輩や全力で応援してくれる先生方との出会い、夢への情熱を共有できるペアとの出会いなど、今までの巡り合わせ一つ一つが今の自分の在り方を決め、一つでも欠けていたらこんなにも充実した高校生活は送れなかったかもしれません。国際大会に挑戦できたことで、高校生活を捧げたと自信を持って言えるものができました。私は全日本大会と国際大会に取り組んだ１年間を通して、一つのことに夢中になり努力することの楽しさと充実感を経験しました。最後にはなりますが、このようなかけがえのない機会を作りサポートしてくださった全ての方に御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

『誰一人取り残さない』会議へ

多胡 七香　渋谷教育学園渋谷高等学校

グローバル・クラスルーム日本協会の第 17 回日本代表団派遣支援事業により、ニューヨークに派遣されて高校模擬国連国際大会に参加しました、渋谷教育学園渋谷中学高等学校の多胡七香です。国連開発計画（UNDP）を模擬した会議で、メキシコ大使を務めました。議題は「国連平和構築活動における包括的な政治体制の構築」であり、主に平和構築における女性の参画や紛争後社会における選挙制度構築のための支援について話し合いました。

メキシコは伝統的に内政不干渉を外交方針として掲げており、多様な政治体制にも寛容で、社会主義国家の多くとも関係を持っています。また、地域単位での繋がりに重きを置いていて、ラテンアメリカの連帯や平和維持を主導していく立場にありました。そのため、メキシコとしては西洋的な特定のモデルに囚われた平和構築ではなく、現地のニーズに合わせて柔軟に変化する平和構築の実現を目指し、紛争の再発率を下げることや被支援国の意見が平和構築に十分に反映されるよう現地と支援国との連携を促進すること、平和構築活動における女性の参画を促進することなどを中心とした複数の政策を掲げて、決議案に盛り込む努力をしました。

会議では日本のセオリーが全く通じませんでしたが、臨機応変に、自由に動くことを目標としていたため、戸惑うよりも日本の会議との違いを楽しむことができました。また、国際会議では交渉を含めて全てが英語で行われるため、周りのネイティブの参加者に比べて自分が英語力の面で劣る事がとても不安でしたが、つたない英語であっても「伝えたい」という気持ちを持って臆さずに声を上げたことで周りの大使が耳を傾けてくれました。

私が模擬国連の一番好きなところは、各国がそれぞれ異なる国益を持ちながらも、より良い世界を作るため、「協力プレー」をするところです。国連の大原則は「国際協調」で、SDG s は「誰一人取り残さない」ことを目指して作られました。模擬であってもそれは同じで、たくさんの大使との助け合いの末に成り立つものだと、改めて実感しました。模擬国連では、国際問題と自分のかかわりを知り、自分の出身国ではない国の事情を第三者目線で見ることができます。模擬国連には「国連会議を模擬する」というだけではなく、会議の参加者のもつ様々な「常識」を大きく変えて、果ては世界を変える力があると思います。

今後はこの経験をいかして失敗を恐れることなく新しいチャレンジに踏み出していきたいと思います。また、模擬国連に関連して、今世界で起こっている多くの国際問題と、その解決のための様々な取り組みに興味があるので大学でさらに深く学んでいきたいです。そして、国際大会に出たことで、バックグラウンドの差や言語の壁があってもお互いに分かり合い、協力することができるのだと実感しました。将来は言語の壁を気にせずに、もっと様々なバックグラウンドを持つ人と、世界で広くかかわっていけるような人材になりたいです。

会議の瞬間だけではなく、ペアとともにたくさんの人に助けられながら突き進み、大きな成長を感じられたこの一年間は私の一生の宝物です。

崩壊していく常識と爆発的な学び

笹尾 佳音　渋谷教育学園幕張高等学校

国際大会に憧れた中一、コロナ禍による会議数の激減で諦めかけた中三、全日本模擬国連大会で受賞した高二を経て、やっと国際大会への参加は現実味を帯びました。国際会議では高速な議論や即興スピーチの連続を経験し、無意識にあった「典型的な模擬国連」という生ぬるい常識は跡形もなく崩されました。国際会議で求められる厳しい条件を激しく叩きつけられ自分の未熟さを実感した反面、はっとする学びから自分が成長していきたい方向を発見する機会にもなりました。

WHO の会議にメキシコ大使として参加し、「周縁化された社会集団への医療提供体制における差別」という議題を論じる中で、私たちは “Leave no one behind”（誰も取り残さない）ことを目指しました。今まで「誰も取り残さない」大使とは会議の流れを多少強引にでも牽引する存在だと思っていました。しかし、すべての大使が議論に納得できるために、共に同じ方向を目指し共に歩む存在こそ「誰も取り残さない」大使だと考え、信頼できる存在になることを目標に会議へ挑みました。議場全体はこの協調の流れに巻き込めなかったものの、私たちのグループ内では信頼関係を構築し、それのおかげでグループ一体として会議を切り抜けられたことを誇りに思います。

今回の国際会議は私の模擬国連人生の集大成でもありました。五年間の模擬国連活動で得た学びの根幹にあるのは、「話の伝え方と聞き方」です。自分の考えを相手が納得できる形で提供し、丁寧に相手の考えを聞く姿勢を示す、などと議論には非常に気を遣います。そういう意味では議論は大変ですが、どの分野においても新たな発想を生み出すために必要不可欠です。模擬国連会議のように常に時間がひっ迫している環境でも冷静かつ真摯に話を伝えて聞くことで鍛えられた議論を進める能力は、今後の人生においても活かされると信じています。

そして、模擬国連の「競技」の面について。会議ではリーダーの立ち位置のために他の大使と争いますし、賞がある場合は他の大使を蹴落として自分の優越性を示さなければいけません。しかし、本来の国連の会議に賞はありません。本来の目的は「協議」であって、「競技」ではありません。とは言いつつも、競技形式のほうが高校生は興味を持ってくれますし、私も賞がなければ模擬国連にここまで没頭していたかはわからないので、この競技性が一概に悪いとも言えません。それでも競技としての模擬国連の面白さにのめり込むあまり、「すべての国が納得できる国際問題の解決策を導く」という模擬国連、そして国連の意義を忘れてはいけないと思います。私たちの活動は所詮国連のおままごとだと言われないためにも、これから会議へ参加する方には議題の提示する国際問題へ真正面からぶつかってほしいです。

最後にはなりますが、派遣事業を通じて国際大会出場の夢を叶えてくださったＧＣ日本協会の皆様、中一から支えてくださった顧問の先生方、夜遅くまで準備をさせてくれた親、応援してくれた模擬国連部のみんな、そして相棒の山下さんに心からお礼申し上げます。この上ないほど楽しく、学びの溢れた経験をありがとうございました。

派遣事業を振り返って

山下 実穂　渋谷教育学園幕張高等学校

中学一年生の頃から、模擬国連国際大会は私の憧れでした。学校の先輩方が派遣事業の報告をしており、心が高鳴ったことを覚えています。そんな私がまさか全日本高校模擬国連大会で最優秀賞をいただき、17 期派遣生の一員となり、そして国際大会での優秀賞の受賞に至るなど、当時は夢にも思っていませんでした。ここでは派遣事業で駆け抜けた日々について、振り返らせていただきます。

派遣事業は、議題と自国のリサーチから始まりました。私たちは世界保健機関の「Discrimination against Marginalized Communities in the Healthcare System」という議題のメキシコ大使を任命されましたが、これは心身の健康を周縁化された共同体にも保障する包括的な議題だったため、あらゆる視点から「健康」について探求しました。例えば、メキシコの医療体制のみならず行政の腐敗や民族構成について調べ、複合的な理由で健康が害されていると学びました。

議論の土台を築いた後は、メキシコ独自の政策を立案しました。ここで念頭に置いた点は「実現可能性」です。政府の主導力が薄いメキシコでは理想のみを掲げても現実性に欠けると考えたので、「地元の非認可クリニックを国営の医療体制に組みこみ医療水準を上げる」や「先住民を医療機関にて雇用して言語の壁を解消する」といった、既存のリソースを活かした政策を考案しました。

そしていよいよ会議本番。私たちは米国の模擬国連の経験がなかったため、あえて会議戦略を立てず、柔軟な姿勢を意識しました。この方針が功を奏したのか、一日目は存在感を出すことができなかったものの、二日目は前日のグループに囚われず柔軟に交渉したことで注目を集めました。特に議論から取り残されていた国々に声をかけ新グループを形成したことは、国連の理念の一つである「Leave No One Behind」の体現となったのではないかと思います。周囲の大使にも「頼もしい」と評価していただき、充実した会議となりました。

2022 年末には派遣事業の長い道のりに不安ばかりでしたが、振り返ると、あっという間の日々でした。英語の資料を頭に叩き込み、政策を練り続ける日々は時には苦しくとも、私の分析力や思考力を鍛え、国際社会の一員としての自覚を養う機会ともなりました。そして、会議本番では日本代表団のみならず世界の高校生から刺激を受けることで、模擬国連に流れるエネルギーを実感しました。模擬国連に励んでいると、たまに「これは机上の空論だ」と虚しく感じてしまいます。しかし、国際大会にてメキシコ出身の生徒に「君の政策は僕の国に良い！」と褒めていただいた経験は、私に模擬国連の力を確信させるとともに、「調べ、考え、行動する」意義を肯定してくれました。今の私は無力な高校生ですが、これからも派遣事業で得た力を活かして「調べ、考え、行動し」いずれは変革を起こすために国際的に活躍したいです。

最後になりますが、派遣事業を支えてくださったグローバル・クラスルームの皆様とスポンサーの皆様、そしてご引率くださった先生方に心より感謝を申しあげます。ありがとうございました。

Personality

今寺 玲菜　聖心女子学院高等科

私の人生の新たな扉を開けてくれた模擬国連。模擬国連で培ったこと、そして模擬国連に全力で取り組んできた日々はかけがえのないものです。中２の２学期から模擬国連を始めて、素晴らしい出会い・経験を通して様々なことを学び、視野が広がり、大きく成長することができました。

“ Sustaining peace is said to be a shared responsibility.” リサーチをしている時にこの言葉と出会い、強く心に響きました。国際大会を通して、国連の資金繰りについて知識を深めることで多くの担い手が集まることで前進することができるのだと感じました。平和活動の持続的な資金調達について考えていき、国際情勢が変化している中で国連のメカニズムを変革していくためには、1 カ国や数カ国の取り組みで解決することはできず、各国の強みを統合していくことが必要不可欠であると感じました。

会議を通して、対話に秘められている力を身をもって感じました。対話は、発信するだけの一方向の矢印だけでなく、相手の主張を真摯に聞くことが重要であり、話す-聞くという双方向の矢印が存在することで意義を見出すのだと実感いたしました。ゆえに、議論を交わすことで各国の色を見つけ、互いの強みを統合していく重要性を学び対話を通じて、一人一人がそれぞれの良さを見つけ、その良さを最大限に生かしていくことで多様性のある国際社会を構築することができるのだと思います。さらにはそれぞれの個性を尊重し合い、各々が強力な個人プレーヤーとなって行動していくことでポジティブな影響を与え合える状況をつくっていけると思います。

あらゆる議題と向き合い、自分が当たり前と考えていることは決して当たり前ではないということを実感いたしました。すべての国が欠けてはならない価値ある存在であるからこそ、国際社会が様々な価値観を包括した多様性のある共同体となることが重要なのだと感じました。物事の本質的な部分を見つけるためには、一方向からの視点ではなく、多角的な視点で物事を捉え、様々な思考のプロセスを踏むことが大切であると思います。

壁にぶつかることも多々ありましたが、上手くいかなかったことは成長へのバネとしていき、壁にぶつかった時も打開策を模索し、自分の中の限界の壁を越えたことで成長することができたと思います。行動してみなければ何もはじまらないということを心に刻み、自分の殻を破っていくために如何なる状況においても諦めず可能性を追求していき、可能性を広げていくために自分のベストな行動をし続けたいです。

派遣事業を素敵なものにしてくださったグローバル・クラスルームの皆様、先生方、どんな時も励ましてくれる友達、いつも見守ってくれた家族、最高な 17 期派遣団、多くの方々に支えていただき、このような貴重な経験を積むことができました、心より感謝申し上げます。これからも周りの方々への感謝を忘れず、この経験を通して学んだことを糧に、目標・夢に向かって邁進してまいります。

模擬国連における「自分らしさ」

近藤 彩叶　聖心女子学院高等科

まず初めに、私たちに栄誉かつ、またとない最高の機会を与えてくださった全ての方々に心より感謝申し上げます。私は国際大会までの過程、そして国際大会という舞台において、数えきれないほどの学びを得ることが出来ました。今回は、その中でも特に国際大会への参加を経て得た学びについて、僭越ながら以下に記させていただきます。

孫子の兵法に出てくる有名な一節に「敵を知り、己を知れば百戦危うからず」という言葉があります。上記の一説を解する上で重要なのは、「敵のことは勿論、己のことを知らない限り勝利を手にすることは出来ない」ということです。模擬国連は自分一人では成り立たず、対話する相手が存在してこそ成立するという前提、また異なる主張が錯綜する中で相互の合意形成を目指していく、という難しさを持った競技です。だからこそ、その環境の中で如何にして「自分らしさ、自分の主張」を確立しつつ、それを維持し続けられるかということは、模擬国連のスキル向上において不可欠な要素だと思っています。より有益な会議を作り上げる為には、会議を構成する大使一人一人が最大限に自身の強みを生かし、戦略的かつ合理的に立ち回る必要があるのです。それが実現して初めて、国際平和を希求し実現させるための、有意義かつ建設的な議論を行うことが出来るのではないでしょうか。

「己」を知ることはそう容易なことではなく、上手くいった経験や成功体験と同時に、辛い経験や挫折を通じて深まっていくものだと私は考えます。私自身、これまでの模擬国連における経験の中で、これぞ成功体験と胸を張って言える経験よりも、むしろ辛く苦しい思いをしたことを数多く思い出します。己を分析し己の実力を知るということは、一見ポジティブな意味合いに捉えられますが、一方で自身のマイナスな面に目を向けなくてはいけないということでもあり、忌避感を感じてしまうことが多いかと思います。しかし、その負の感情を乗り越え、己を知るというプロセスを経ることこそが、自分らしさの確立、そして真の模擬国連スキルの醸成に繋がっていくと強く確信しています。そのためにも、自ら積極的に何事も経験すること、失敗を恐れず挑戦してみること、そして挫折や苦難を乗り越えた先に、「敵を知り、己を知れば百戦危うからず」という言葉を体現することが出来るはずです。

私が模擬国連に出会い、これまで約二年間全力で取り組むことが出来た最大の原動力は、とにかく純粋に模擬国連のことが大好きである、という気持ちです。そして、その気持ちを維持し続けられたのは、互いに切磋琢磨し刺激し合ってきた多くの同世代の仲間の存在があったからです。その仲間達と共に過ごした経験や思い出は、これからの私の人生においてかけがえのない財産であり、自身の成長と共に模擬国連を通じて得ることが出来た大きな収穫の一つです。

これから新たに模擬国連に挑戦する中高生、そして既に模擬国連に情熱を注いでいる皆さんが、今後の模擬国連を更にレベルアップさせ、その魅力を高めてくれることに期待を込め、この報告文を締めくくらせていただきます。

ありがとうございました。

普遍性の現代を生きる

池田 高啓　灘高等学校

模擬国連を始めて１年、全日本大会という一つの目標が過ぎ去り、国際会議へのモチベーション維持に苦戦する自分を打ったのは、なぜ模擬国連をするのか、という問いでした。

それとともに、国際会議の場で僕は何ができるのかという問いが重くのしかかりました。議論の流れを掴み、オルタナティブな案を提案する「言語感覚」という僕の最大の長所を手放すことになる今大会は、大使として求められる力を考え直すきっかけとなり、立ち返ったのが、「対話」に対する姿勢でした。

先輩や GC スタッフの方々から、国際大会は予想外の連続だとアドバイスを頂いていました。実際、スピーチやモデが主体の特殊な議事進行を活かしきれず、場慣れした話術で着実に存在感を示す大使もいる中、何故かほぼ指名してもらえなかった僕たちは、議場へのアピールに欠いてました。今思えば、ここでふてくされずに、丁寧にメモを回したことがアンモデでの成功に繋がった気がします。メモ１つにしても闇雲に送るのではなく、立場の近い国に絞り、モデの主張に共感した、や「あなたと一緒に議論がしたい」という思いが伝わるよう短文を工夫しました。

会議を通して一つ確信が持てたのは、相手の土俵に立つ重要性です。非常に多種多様な意見が飛び交う国際会議において、自分の意見を主張しすぎず、まず相手の意見を聞き、どう協力できそうか探ることを意識しました。その意見がたとえ賛成できなくとも、まずは相手に好きなように喋ってもらうことで、心地よい会話を形成する、これこそが「対話」の重要な点であろうと思います。そうやって相手と土俵を一にし、「話ができる大使」という信頼を醸成できたことが受賞の一因だったと分析しています。

一方で、模擬国連という競技上、また自グループの保守的な外交方針もあり、他グループとうまく協力できないこともありました。しかし、1 人の大使として、自国益のプライドと、勝利が絡む競技性を捨てたくはありません。対話の道を開くことは、模擬国連引いては国際社会の本質であると痛感しつつも、それに対して冷静で、冷徹であり続ける必要性を考えさせられました。

よく言われるところに、高校生が国連を模擬したところで何か世界が変わるわけでもない、という悲観論があります。ただ途上国の切実さの淵に立たず、先進国から国際問題を我が物顔で議論する自分が馬鹿らしく、嫌気がさす、そんな混沌とした感情の中でも、「一分一秒を争って国際問題を前に進める」というがむしゃらな自分に高揚し、これが僕が模擬国連をする理由でありました。

僕はこれまで国連やその諸活動を、ユートピア的で無意味な普遍性の追求に過ぎないと諦観するところがあり、今もそれを完全には拭い切れないでいます。しかし、今回の派遣事業を通して気付かされたのは、普遍性の追求は時に意味を持ち、世界を動かす確かな原動力になり得る、という一見当たり前な、普遍的な事実でした。国連総会のあの漸進感に身を置いたことは、「国際人」として歩まんとする原点となったに違いありません。

こうして振り返ってみると、やはり僕は模擬国連が大好きでしかたありません。

広がり続ける世界

山岸 侑生　灘高等学校

高校１年生の夏前に、先輩に誘われて模擬国連を始めました。サッカーの練習後、唐突にお前ならできる、と。そこで踏み出した一歩により、今、この場にたどり着くことができたと考えると人生何が起きるか本当に分かりません。

模擬国連は、私の世界を何倍も押し広げてくれました。公立の学校で過ごした私にとって、世界とは同じクラス、学校、地域の知り合いに限られていました。しかし、模擬国連では日本中、いや世界中の意志ある若者と、また刺激し合い、競い合う仲間と出会うことができました。これは、模擬国連の大きな魅力の一つだと感じています。

高校模擬国連とは、競技性のあるもので、会議を勝ち進んでいくために戦略を練った会議行動をしがちではありますが、その”勝ち”とは果たしてどのような判断基準の元にあるのか。また、その勝ちに何かを見出すことができるのか。本来の国連の、現状を否定し、国益に依存しつつも合意形成に向かうはずの場が果たしてあるのか。少し矛盾を感じざるを得ないです。しかし、それでもこの競技には、日本を飛び出しグローwバルな視点を育んでくれると同時に、同世代の未来志向な仲間と、どのように異なる意見を合意へと持っていくのか、論戦を交わし、切磋琢磨できる、希少な場として、私を含め多くの中学生、高校生の成長に大きく寄与していると確信しています。また、国際問題を直視する機会があることにより、日本に住む自分というのに固執するのではなく、世界の中の自分として捉えることのできる好機でもあると思います。外向き志向の若者を輩出することは、将来的な国際問題の解決に少しでも近づくのではないでしょうか。

そして NY 派遣。文字通り、期待と不安いっぱいで飛び立ちました。その NY で私は何を感じ学び得たのか。

一つは、世界の存在をはっきりと認識できたことです。アメリカ人、トルコ人、メキシコ人など、世界のあらゆる生徒が同じ議題、国際問題について真剣に議論し、より良い結論を導き出すために試行錯誤する。日本人だけではない、異文化異民族の人々が共生しているのが世界なのだと。そのような状況に実感が湧かなかったものでした。そして、なんと狭い世界で生きていたのか、自覚させられました。NY の頂上の見えないビルを眺めつつ、世界の広がりを肌で感じました。

また、NY は東京とは違う。もちろんそうです。しかし、何かもっと根本的なところで違う。そう感覚的に感じました。何が違っていたのか。私が思うに、NY と東京、共に何か鬱屈とした雰囲気がありつつも、NY はより一層単調であり、かつ何かにかられて、社会がますます前へ前へただひたすら進み続けている。そのように感じました。異文化、異なる社会の違いに触れることで、社会の構造的な差異やそれらについての本質を考える機会を得ることができました。

そして、忘れてはいけないのが数々の出会い。尊敬する様々な先輩との出会い、また一生の仲間となるであろう他の派遣生との出会い。刺激的で時には優しく支えてくださり、ありがとうございます。

最後になりますが、模擬国連の活動を通して支えてくださった先生や友達、また、全日、NY 派遣では本当にお世話になった GC スタッフのみなさま、そして、いつでも側にい続けてくれた両親に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

模擬国連以上に得られること

小島 圭登　西大和学園高等学校

学校の友達が模擬国連に参加すると聞き何となく縁を感じて入ることになった模擬国連ですが、今思えば模擬国連は僕に本当に多くのことを与えてくれたのだなあと思います。はじめて会議に出てからだんだんと魅力を感じ必死に努力したその先の、その最終到達点にあった国際大会は自分にとって模擬国連とは何だったのか、模擬国連を通じてどう成長したのか、世界とは何なのかを教えてくれました。自分の人生のこれからに大きな影響をあたえてくれた気がします。

この国際大会に出た自体が大きな意味を持つものだとは思いますが、そのための準備も大きく僕を成長させてくれたように感じます。国際大会の準備は全日本大会が終わってから約半年続きましたが予想していたよりも遥かに大変で辛いものでした。勉強や部活、学校行事との両立は難しいものです。国際大会自体が何なのかもわからないような、先が見えない中ただがむしゃらに当時はやっていたような気がしますが今思い返してみると、渡米までという制限時間が設定された中で今自分は何をやるべきで逆にやるべきでないのか、といった優先順位をつけて物事を捉えていく力であったり、少ない時間で最大限の成果を上げるにはどうしたらいいのかを考える力、などの日常生活や受験勉強を始めとしてあらゆることに生かすことができる能力を身に着けることができたのではないかと思います。また、特に学校行事や模試、考査、部活などが全て重なり自分のキャパシティの限界が近い中でとにかく頑張り続けるという経験も自分にとっては大きなものであったなという風に思います。

渡米に関しては、会議の内容も重要ではありますがとにかく高校生のうちに何らかの形で日本を出て短期間でもいいから世界を見てみるという経験が大切である、と感じました。学校の中で勉強をしたりニュースを通して世界のことを知るのも良いことですが、百聞は一見に如かずの通り、実際に目で見て経験するということは単なる知識の領域を超えて意識や何かに対する思い、という領域にまで影響を与えると感じました。世界を見る、という表現は大げさかもしれませんがとにかく海外を一度見てそして海外の人と会議をし議論を交わすことで自分の視野のいかに狭いかを知り、今の自分の目標が本当は低すぎるものではないのか、自分はこうありたいと願い自分の理想像は本当にそれで正しいのか、自分の見方は無意識のうちに一面的になっていないか、世間一般で正しいと思われることは果たして本当に正しいのか、など自分の常識や思い込みを改めて問い直す機会が多くあると思います。言葉では絶対に伝わらないとは思いますが実際に渡米して会議に出てみればきっとわかるはずです。

得たものももちろん多かったですが自分の弱点も改めて露呈したように思います。大変だった準備も含め派遣事業の全てが自分を大きく成長させてくれたと改めて思いますし、この本当に素晴らしい体験はきっと忘れることなくこの先の自分の人生においても大きな心の支えであり続けてくれると思います。

最後に、この派遣は渡米中だけでなく派遣前後に渡ってとても長い期間多くの方々に大変心強い支えを頂きました。グローバルクラスルーム日本協会と後援企業の皆様、西大和の先生をはじめとする教員の方々などすべての方々に深く御礼申し上げます。本当に有難う御座いました。

派遣事業を通じて学んだこと

松本 拓己　西大和学園高等学校

今回の国際大会では、今までよりも遥かに長い約 4 か月間、一つの議題に向き合ってきました。だからこそ、普段では手に入れることができない新しい視点を身に付けることができたと思います。さて、この今回の議題は、平和維持活動の資金不足をどのように解消するかということでした。僕は、今まで国際政治について考える際に、今回の議題にもなっている PKO 活動などの国際協力の素晴らしさや SDGs の重要さといった理想的な部分にのみ目を向けてきました。しかし、各国が国連に拠出するよう要求された額が高すぎるといった理由や、PKO 活動が単純に自国の外交方針に反するといった理由など、さまざまな自国ファーストの理由で、平和維持活動が資金不足に陥っていることをこの会議を通じて知りました。その上で、国際政治は、国と国の利害がぶつかりあうために、表面的な理想論だけでは語れない難しさがあるということを実感することができました。そして、この国際大会での学習を通じて、国連がこの難しさに果敢に挑戦し続けることが国連の存在意義であるということに気付くことができたことは、模擬国連を行ってきた一人として貴重な経験だったと思います。

次は、会議以外のことから学べたことについてです。海外に今まで行ったことのある経験はほとんどなかったこともあり、日本と世界の文化の違いを実体験として感じる機会がたくさんありました。この派遣事業を通じて一番強く感じた文化の違いは、人々の間の距離感の近さです。会議終了後に、海外の人と交流する時間がありました。その時に、フレンドリーに積極的に話しかけてくれたこと、会話をしてくれたことは非常に新鮮でした。また、これに関連することでもありますが、店員の自分への対応も非常に距離感が近かったことは本当に衝撃的でした。最初はなれない距離感に戸惑いましたが、これも人々の間の距離感の文化の違いの現れだと実感する機会でした。今までの自分にとっての文化の違いとは、教科書や本の中で理解してきたことでした。しかし、実際に異文化の地に身を置くことで、身をもって感じることができた文化の違いは、本当に何もかも新鮮でした。そして何より、その新鮮さを感じることは自分にとって非常に貴重な経験でした。何か新しいことを知る時は、本や教科書を見て理解した気になるだけでなく、その場に身をおいて感じることの大切さをこの派遣事業を通じて知ることができたと思います。また、海外との文化の違いを知ることができただけでなく、逆に普段日本で見る光景が当たり前だと思っていたことでも、それが当たり前のことではないと肌で感じることができ、日本の良さを再発見できたと思います。例えば、街の綺麗さや空気の綺麗さ、そしておもてなしの心というのは、この事業を通じて改めて知ることができた日本の良さでもあります。この事業を通じて再発見することができた日本の素晴らしさを一人の日本人として守っていきたいとも思えました。

最後になりましたが、この派遣事業からたくさんのことを学ぶことができ、忘れられない経験になりました。ご協力いただいたすべての皆様、本当にありがとうございました。

模擬国連が与えてくれた挑戦と自信

稲田 孟　桐朋高等学校

模擬国連は僕にとって、自分の可能性を広げてくれた最高の出会いでした。模擬国連の大会参加者や派遣生との交流の中で、他人から多くのスキルや考え方を学びながら、自分の性質と強みを自覚することもできたと感じています。

国際大会に至るまで、私たちは、憧れの国連の舞台へいけること、これ以上にない環境で海外の高校生とレベルの高い議論ができることとそれへの不安をモチベーションにペアで準備を重ねました。この準備段階では、ペアと何度も議論を繰り返し、時には加熱を経ながらその過程で、本当に有効な政策を練り出していきました。振り返ると、このときお互いが建設的な批判をし合えたことで、自分たちの政策が洗練されてゆき、それを端的に説明するディベート的なスキルを養っていくことができたと感じます。

大会での議論に向けた作戦として、UNDP 議場にて議題との利害が見出しにくいベトナム大使を務めた私たちは、リーダー国として立ち回りスタンスが似た国をまとめ、自国の特異性を強調して声を大きくするのが最も有効だと考えました。とはいえ、海外での会議の雰囲気もわからず、ましてやペアがどちらも非英語ネイティブの私たちにとって、いきなりリーダー国を担っていこうと言うのは無謀に感じられました。しかし、不安を抱える同時にそれは今回の国際大会における私にとって最大の「挑戦」となっていました。模擬国連という場において、この不安をカバーし、目標に挑む手段は事前の周到な準備のみでした。事前に聞いていた国際大会は日本の会議と全く形式が違うという話による不安も少なからずあり、そのため、全体的な議題、議論の方向性についてあり得る可能性を予測し、自分たちがそれぞれの状況で主張すべきことをまとめ上げ、大会当日を迎えました。

結果的に、モデ中のメモ回しで政策の一致が確認できた国を中心に、「過去に紛争後状態を経験した国」として小さなグループを組み、ここでの議論を引っ張ることに成功しました。出だしで会議形式の違いに困惑しうまく動けなかったことから、中盤でうまくグループを組むことができた時には達成感よりも驚きがありました。このグループでは、私自身が数人のグループでの議論を引っ張り、想定していたよりも深い政策提案まで持っていくことができたので、嬉しかったし、強い満足感を覚え、また自信にもつながりました。特に、私が議論した参加者の方たちは知識やリサーチについてのレベルが高かったように感じ、私自身も事前に周到に議題と自国をリサーチしていたため、お互いが知識を身につけた上でレベルの高い国際問題についての議論ができました。これは私が国際大会に参加するにあたって楽しみにしていたことだったので、議論している時間そのものがとても楽しく、充実していました。

議論にあたっては苦労や壁も当然ありましたが、その中で海外ならではの刺激や達成感も十分に味わうことができました。今後も海外など新鮮な環境での議論をさらに楽しんでいきたいと思います。また、今回感じることができた周到な準備があればどんなことでも自信を持って挑戦していけるのだということを信じて、この先も一つ上の目標に挑戦していきたいです。

未来へ

小池 翔太　桐朋高等学校

第 15 回全日本高校模擬国連大会で最優秀大使賞を受賞して、はや一年半。私にとってその日々を過ごすことはとても長く、また振り返ってみれば一瞬のできごとでした。

私たちは派遣 16 期として渡米する予定でした。しかし、新型コロナウイルス蔓延の影響で渡航は断念、国際大会へはオンラインでの参加を余儀なくされました。あの日、確かに掴み取った NY への黄金の切符は、固く握りしめていたはずの手の中で、いとも簡単になくなってしまったのです。

昨年 12 月、NY に行くことができなかった 16 期から希望者を対象に 17 期と一緒に渡米できると知り、それはまさに再び時計の針が動き出したような感覚でした。NY 派遣にかける思いが、より一層強まっていきました。17 期は、お互い顔見知りのメンバーが多く、渡米前から親睦を深めることができ、現地でも多く行動を共にしました。会議準備はもちろんのこと、空き時間の観光や、何気ない会話までもがとても良い思い出です。

派遣事業初日、JFK 国際空港に降り立ち、タクシーでマンハッタン島へと向かいました。高くそびえるエンパイアステート、国連本部ビル、ついに夢が叶ったと少しほっとする気持ちと、これからどんなことが待ち受けているのだろうとワクワクする気持ちで胸がいっぱいでした。最初に私を待ち受けていたのはカルチャーショックでした。特に交通マナーの緩さに関しては、17 年日本で育ってきた私にとって、怖いと感じる程でした。初日は半日自由時間だったので、派遣生のみんなとブルックリン橋やウォール街、ワールドトレードセンター跡地などの観光名所を回り、ここが世界の中心なのかと圧倒されるばかりでした。

さて、我々は UNDP の”Fostering inclusive political process in post conflict societies “という議題の会議にベトナム大使として参加しました。私は海外在住経験がなく、英語に堪能ではないので、事前準備としては主に、ノンネイティブスピーカーとしてどのように会議で存在感を出していけるかということを考え会議に臨みました。

会議本番では、やはり英語での議論に苦戦しましたが、自分たちの政策を相手に伝えるという点ではあまり不自由は感じませんでした。一方、ネイティブスピーカーが高速で議論していく中で、質問をしたり、またすぐに質問に答えたりするということがとても難しく感じられました。会議全体を通して反省点の多く残るものとなってしまいましたが、英語での模擬国連という貴重な体験をすることができました。

派遣を通じて、私はより果敢に、そして粘り強く挑戦していける人間になることができました。模擬国連は間違いなく、世界を知らなかった私の人生を大きく変えてくれました。

模擬国連は、それを行って世界が変わるわけではありません。それでは高校生が集まって議論をしたところで意味なんてないのでしょうか。この広い世界で 1 人 1 人がもつ力なんて極めて微力なものです。しかし、模擬国連活動がもっと普及し、より多くの人が経験し、そして彼らが世に出て行った時、なにが起こるでしょうか。私は、それは、必ず意義のあることであると信じています。

この一年半、多くの人に支えられ、私たちはたくさんの経験をし、成長することができました。特に、嬉しい時、楽しい時、悔しい時、そばにいてくれた派遣生のみんな、そして GC スタッフの皆様には感謝しかありません。これからは大好きな模擬国連がずっと続いていくことができるように恩返しをしていきたいです。
改めて、全ての出会いにありがとう。最高の一年半でした。

模擬国連に改めて向き合って感じたこと

三澤 聖子　聖心女子学院高等科

私にとって今回の派遣事業は、自分が約５年間続けてきた模擬国連の意義や目的を、改めて深く見直し、向き合った経験でした。

国際大会当日、海外滞在経験がなく、英語も得意でない私は、会議できちんとした議論が出来るのかという不安に駆られていました。自分の主張をスムーズに英語で表現できるようにするなどの準備はしましたが、実際の会議では他の大使の発言を聞き取ることが出来なかったり、自分の主張を伝えるのに時間がかかったりすることも多々ありました。聞き取れない部分は繰り返してもらう様にお願いする場面もありましたが、全く嫌がることなく易しい言葉で言い直してくれました。もちろん、クローバルな人材が集まる場において英語力は必須ですが、母国語が違う中でも誠実に相手に話に耳を傾けあう姿勢、信頼関係がコミュニケーションにおいて最も重要だと痛感しました。障壁があっても、議題や議論に対する真剣さがお互いの信頼関係に繋がっていくことに感銘を受けました。

表敬訪問では、小松原様と堀場様のお二人とも、「196 通りの常識、価値観があっていい。話し合うことであらたな正解、方法を作ってゆけば良い」といった趣旨のお話をされていたのが印象的です。模擬国連を通して様々な国を担当し、その国ごとの国民性や国家の方針を知る中で、宗教や伝統など、どうしても埋めることの難しい価値観の差をどう埋めていくべきなのか、どこまで妥協していいのか疑問に感じることが多くありました。しかし、小松原様と堀場様のお話を伺って、価値観の差を無理やり埋めようとするのではなく、議論を重ね新たな方法を模索する重要性に気付かされました。

また、ＵＮＤＰの小松原様がお話しくださった、「国連ならではの付加価値」の大切さについても印象深いです。近年、ウクライナ侵攻やミャンマー問題などで、国連の問題点が指摘されている中で、問題点を改善のみに注力するのではなく、そのような現状の中で国連の役割を最大限発揮する方法を模索する事が重要なのだと痛感しました。

派遣事業を通して、模擬国連に取り組んでいる同年代の高校生との交流も、貴重な経験だったと感じています。特に、今回私は初めて他の学校の高校生とグループを組み、準備や大会参加などを経験しました。準備期間は、自分には思いつかない視点やアイデアに日々刺激を受け、議論に熱中出来た、本当に楽しい時間だったと感じます。

高校一年生で全日本大会に出場させていただいた際には、国際大会は自分にとっては無縁な、遠い憧れの存在でした。その舞台に自分が立たせていただいたことを誇りに思うと同時に、今後も様々な形で国際問題に向き合っていきたいと思います。

最後にはなりますが、このような素晴らしい機会をサポートして下さったすべての方に深く感謝しています。本当にありがとうございました。

支援団体一覧

本事業の実施にあたり、多くの方々から温かいご支援を賜りました。ここに厚く御礼申し上げますとともに、謹んでご芳名を掲載させて頂きます。

後援

外務省
文部科学省
国連広報センター

協賛

株式会社公文教育研究会

協力

日本航空株式会社、理想科学工業株式会社、みらいぶ（河合塾）

助成

公益財団法人公文国際奨学財団

メディアパートナー

編集・発行　　グローバル・クラスルーム日本協会(JCGC)

発行：令和 5 年 7 月